

【NTR支配】夫の上司に墮とされる強制絶頂3

「奥さん寝取らせてもらいました」キスマークから始まる修羅場。
夫の目の前で上司に犯され、壊れてゆく献身妻

サンプル（一部抜粋）

隣で規則的に響く裕也のいびき。

「仕込んだネタの爆発は僕が居なくなつてからの方が効きますし。」

そんな黒崎さんの言葉が、ぐるぐると脳内で繰り返し流れる。

黒崎さんの仕掛けた爆弾とは、一体なんなんだろうか。

何度も溜息をついているとモゾモゾと裕也が動き始めた。

「んー…おはよう…」

少し枯れた声…

「おはよう。」

出来るだけ冷静に…私を乱すあの人の事を頭から排除するように、挨拶を返した。

「トイレ…」

裕也はまだ寝ぼけているのか、二日酔いなのか…ふらふらと部屋から出て行った。

「……」

大丈夫。きつとただの脅しだ。私と黒崎さんの関係を裕也にバラすメリットなんて、ないはずなんだから。

「ねえ、奈々？」

寢室のドアがバンッと勢いよく開き、首を傾げた裕也が入ってくる。
音に一瞬びくつとして、上半身を起こした。

「うん？」

「これ、なに？」

裕也は手に私の下着を持ち、どこか怪訝そうな表情でそう聞いてきた。

「え……？」

あれは……昨日黒崎さんに奪われた下着……。なんで裕也の手に……？
焦りで背中にじわつと嫌な汗が流れ、手が小刻みに震える。

「なんかジャケットのポケットに入ってたさ。」

なんでこんな場所に奈々の下着が入ってるのかわからない。

ジャケット……？

もしかしてタクシーで……黒崎さんが裕也のポケットに入れた……？

「あ、えっと……違うの。」

回らない頭を必死で回転させ、私はわざとらしく二へつと笑った。

「ん？」

「えつと…その…あ！」

えつとね、裕也と…したいなと思って…」

「俺と…？」

「面と向かって誘うのが恥ずかしくて、その、えつと…」

あまりにも苦しすぎる言い訳かなと思いつつも、一度ついた嘘はつき通すしかなかった。

（中略）

「ねえ、奈々…」

「ん…？」

「背中その痕…なに？」

「え？」

「なんか赤くなってるけど…」

「赤く…え、なんだろう…？」

バクバクと激しく鼓動する心臓の音が、耳の奥でいやに響く。背中…たしか昨日…黒崎さんに犯されている時、背中に鈍い痛みを感じたんだっけ…

まさか…あの時痕をつけた…？

裕也に怪しまれるのが怖くて、何も気づいてほしくなくて…冷や汗が止まらなかった。

「…虫…かも！」

「虫？」

「う、うん…なんだろうね、気づかなかったよ。」

いつもよりわずかに上ずった声。

裕也の指が痕をなぞるように背中ですべる。

（中略）

ガチャッと扉が閉まると同時に、黒崎さんに手首を掴まれた。

「…っ！」

「爆弾は楽しんでいただけました？」

感情のない冷たい瞳…。

「…楽しむわけじゃないじゃないですか…。」

裕也にバレそうになったのに…。」

「…バレなかったんですか。残念です。」

黒崎さんが毒を吐き捨てるように、溜息をつく。

「…身体は…許してるんですから…日常までは壊さないでください…。」

彼の冷たい表情がどこか恐ろしく…私は少し震える声でそう懇願する。

「…初めての時も昨日も、僕にあれだけ壊されて、自分から奥を望んだくせに…すぐにそうやって理性的になるんですね。」

「…あれは…」

「…まあ…また壊せばいいだけの話か…」

小さなボヤキが聞こえた瞬間、壁に掴まれた手首を押し付けられ…強引にキスをされた。

「んん…ん…」

息が出来ない。無理矢理ねじ込まれる舌が私の舌をすくう度に、ぞくぞくとスイッチを入れられる。

「ん…ん…あ…」

くちゅ…つと響き、黒崎さんの唇が私から離れる。

「はあ…っ…」

息を整えるように呼吸をする。

「…まだキスだけなのに、そんな顔をして…」

黒崎さんの少し冷たい指先がそっと私の頬を撫でる。

「…っ…」

「…奈々さん。」

黒崎さんが絞り出すように私の名前を口にする…。それがどうして…悲しく苦しく聞こえるの

か…分からない。

(中略)

縛られた手を下ろし、そつと私のお腹を撫でる黒崎さんの手を握った。

「…黒崎…さん…」

「はい？」

「そろそろ…教えてもらえませんか…」

「何を？」

「裕也が過去に何をしたのか…どうなれば…復讐が終わるのか…」

「……」

これ以上飲み込まれないように、そのゴールに近づくために…裕也を裏切る時間が少しでも短くなるように…私はそつと疑問を紡いだ。

黒崎さんは戸惑うように視線をそらし…ゆつくりと湿った唇を開いた。

「…奈々さん、もし祐也くんがあなたを裏切り、他の女を抱いていたとしてもその愛情は変わりませんか？」

「…え？」

黒崎さんの言葉の意味が分からない。

裕也に、そんな『もし』はありえないのに。

「何言って…」

（中略）

私はそつと彼の背中へと手をまわし、シャツをぎゅつと握った。爪が食い込むほど強く…。

「そんなに締めないでください…。」

耳元で彼の低い声が響く。少し吐息が漏れていて、奥へと進む彼のモノがぐつと硬くなった。

「んう…あ…おっきいの…だめ…あ…ああ…っ」

「もう少し待ってください。」

奥、突いてあげるから。」

その言葉の数秒後、ズンと奥を突きあげられた。

「んああああ…あ…あ…黒崎…さん…だめ、動いちゃだめ…っ、ああ…」

ただ奥に到達しただけ…

裕也の優しいセックスとどう違うの…？大ききだけではない気がする…。分からない…。耳元

で苦しうに呼吸をする黒崎さんの吐息だけでも…私は壊れそうになる。

「…突いてほしいくせに…」

「や…また…壊れちゃう…から…あ…」

彼の背中にしがみつき、いきそうな身体を震わせ…必死で言葉を紡ぐ。

そんな私の髪をそつと撫で…黒崎さんは身体を起こした。

「…壊れてください。」

穏やかな表情で放たれる優しい命令…。

(中略)

「ん？」

つて裕也の声が聞こえて腕を掴まれた。

「…？」

「シャワーあびた？」

「え？」

「いや、なんか良い匂いがしたから…。

それに…首も虫に刺されてるよ…？」

怪訝そうな顔…。

「…香水…変えたから。」

それに最近虫が多いから。」

黒崎さんは…今全てをバラさない私に失望するかな…。

でもそんなに急には…出来ないよ…。

「ふうん…？」

裕也は疑うように私の事をじろじろと見る。

「ごめん、疲れたから寝させて。」

（中略）

そつと内ももを撫でながら、亀頭でクリトリスと膣をぐちゅぐちゅと弄られる。

「あ…っ、早く…っ」

「イクのはダメですからね。」

ヒクヒクと期待する膣へ、警告しながら挿入される。

「んあぁあ…っ、あ…あ…」

「ダメ。」

イこうと身体をそらしてしまう私の頭を、黒崎さんがそつと撫でる。

「まだダメ。」

奈々さん、分かった？」

髪を撫でるその指が、あまりにも優しくて…涙が出そうになった。

（中略）

ただど次の瞬間、玄関の鍵が開く音が鳴った。

（支配の全容は製品版にて）